
Lost Refrain

村間 涙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Lost Refrain

【NZコード】

N4553Z

【作者名】

村間 泪

【あらすじ】

豊かな国土を誇る一国、ソレイユ。

リーヴル領の公女ルイクはその呪われた歴史を背負うこととなつた。最愛の兄との別れ、忌み子としての過去、そして彼女は旅立つた。兄を取り戻すため。

自信の運命を知るために。

1 (前書き)

バトルによる流血などの残酷な描写を含みます。
ご注意ください。

蒼天にそびえる館の一角、空中庭園で、一人の少女が剣を握つていた。

その向かい、十数メートル離れている場所には少女よりも幾何か年上の青年。

少女の名を、ルナリス・キリク・リーヴル。

略した愛称でもあるルイクとも呼ばれる彼女は、このソレイユと呼ばれる国のリーヴル領の公女だ。

それに向かい合う青年の名はレグ・バーカス。

リーヴルお抱えの騎士団の副団長であり、ルイク専属の護衛騎士である。

二人は練習用の木剣を構えて対峙していた。

「行くぞつ」

しばらくの沈黙をやぶつたのはルイクだ。

真剣な表情に微かに緊張の色が浮かんでいる。それを払拭するように剣を中心構えると一気にレグまでの距離を詰める。

レグは動じた様子もなく無表情なまま、余裕な態度でルイクの剣を受け止めた。

「くつ……」

力押しでは負けると察したのだろう、ルイクは剣を弾くと後ろへ一歩飛び下がる。

「そんなものが、ルイク」

主従関係にあるにも関わらずレグの口調は砕けていて、態度もまるで大きなものだった。

いくらルイクがそれを望んだとはいえ、忠実な臣下たちが聞いたら氣絶してしまいそうだ。

「つぬせこつ」

かくいう彼女の口調もまた臣下からしてみればあまりよろしいものではないのだが……ルイクは吠えるようにそう叫ぶとまたレグに詰め寄った。

数撃、弾きあうように剣を交える。

ルイクの額には汗が滲んでいるのに比べてレグは息一つ乱れていない。それが一人の力の差だった。

「終わりだ」

気付くとルイクは地に片足をついており、剣はルイクの手が届かない場所に転がっている。そしてレグの剣先はルイクの喉元にあてらっていた。

ルイクは悔しそうに唇を噛みしめてキッと強気な瞳でレグを睨んだ。

「もう少し手加減してくれてもいいじゃないか！」

公女らしくないどころか女らしくさえない言葉づかいにレグは小さくため息をついた。ルイクの兄弟ですらこんな凶暴な言葉づかいはしないだろうに。

「ルイク、もう少し女らしくできんのか。第一、手加減したら練習にならないだろ？」

もつともなレグの言葉には全く反論できない。そういうえばレグは剣の腕だけではなく口も達者なのだ。…悪い意味で。

「ああむひー明日ハセリベンジしてやるからー。」

口でも敵わないと思ひや否や、ルイクは立ち上がるとレグに対して細やかな抵抗…あつかんべをしてさうと館の中へと入つていつてしまつた。レグはそれを見送ると少しあく元を笑わせてルイクと自分の剣を拾い、それに続いた。

穏やかな、春の午後のことである。

「ルナイリス？」

ルイクとレグが屋敷に入ると穏やかな青年の声が聞こえてきた。ルイクの正式名称、ルナイリスと呼ぶ人物は身内でも一人しかいない。ルイクの実兄であり、リーグル家の次期当主であるフェンライトだ。

「フェン兄様！」

ルイクはさつきまでの仏頂面を満面の笑顔に変えると階段を駆け下りフェンライトへと駆け寄った。その態度の違しようとレグは苦笑を漏らす。

「また剣の練習か？」

「はい、レグに稽古をつけてもらっていました。」

フェンライトはレグに視線を向けると、申し訳なさそうな笑みを浮かべた。

「すまないな、レグ。またルナイリスに付き合わせてしまって。」

ルイクとは正反対の態度のフェンライトにレグはどうとかむず痒いような気持ちになつた。

フェンライトが嫌いなわけではないが、ルイクのよつに遠慮せずに接せられるほうがレグには合つてゐるのだ。

それでも一応はリーヴル家に仕える身である。レグは無言のまま首

を振った。

「ルナリスト、あまりレグに無理をさせるなよ？それと…」

フーンライトはルイクに一歩歩み寄るとその肩ほどにあるルイクの金の髪に指を滑らせ、

「お前自身、あまり怪我のないようじ。もう少し公女らしくしてもいい年頃なんだから。」

まるで恋人がするそのように、その髪に口づけた。

「はい、兄様」

ルイクはまつたく抵抗することなく、むしろ嬉しそうに頷いた。
なんなんだ、このシスコンブラコン兄妹は。とレグはフーンライトにはばれないようため息をつく。

ルイクは四人いる兄たちの中でフーンライトだけにはこうなのだ。

「それじゃあな。わたしはこれから父とグレセア領に行かなければならないんだ。」

フーンライトはそう言つとさつとルイクから離れた。

ルイクは少し名残惜しそうに表情を歪めるも、公務を邪魔するわけにもいかず、結局口を開ざしたままだった。そしてフーンライトのフェンライトの去つたホールに落ちた沈黙。ルイクは無言で歩きだし、レグもそれに続く。ルイクが止まればレグもぴたりと止まつた。くるり、とルイクが振り返る。

「なんで付いてくるんだ?」

「留守中はお前から離れるな、と言われているからだ。」

「誰に」

「リーブル公に」

「父様か…」

なんだその口ぶりは。お前の父親だろ? フンライドだったらよかつたのか。

レグは表情も変えずに胸の内だけで毒づいてみる。
大げさにため息をついた後、ルイクはきつぱりとこいつ言い切った。

「ついてくるな」

「無理だ」

しかしレグに間髪入れずに切って捨てられ、押し黙られざるを得なかつた。

いくら剣を習つていてはいえ、ルイクはリーヴル家の公女である。他の兄弟はすべて男で、しかも全員それなりに武芸を頼つており、またそこそこ強い。それに比べてルイクはまだ17歳の少女で体も華奢だ。

そんなルイクがリーヴル公の反乱分子から狙われるのはむしろ当然のことだった。

だからリーヴル公はレグというリーヴル騎士団の中でも一、二を争う剣の使い手を護衛としたし、それはルイクも自覚していた。

けれど、ルイクだって一応は年頃の女の子である。

こつも四六時中誰かに付きまとわれたらいい加減うんざりしてしまう。

そんなルイクの思いに気付いてか、レグは珍しく優しく微笑んだ。

「ルイク。俺のことは気にするな。~~空虚~~のよつなものだと思え。」

ピキ…とルイクの動きが固まる。

それが出来ないことはレグが一番知っているはずだ。

しかもその笑み。絶対に嫌味で言つただろう。

ルイクは引きつりながらも公女らしくにっこりと笑い、

「それが無理なんだつてば！」

レグの虚をついて力いつぱい足を踏みつけてやつた。
思い切り踏みつけたものあまりダメージがなさそつたのは、
悔しいから気にしないでおいた。

夢を見る。

不思議な夢だ。

自分が、鏡に映った自分を見つめている、ただそれだけの夢。しかしルイクはなんとなくそれが恐ろしかった。

そのうちに鏡の形は崩れ、一つの銀の指輪になる。

無意識のうちにそれに手を伸ばしー…

そうして、目が覚めた。

ルイクはベッドの上で目だけを開け、またか、と一人ごちた。

最近はあの夢ばかり見る。そして必ず、例の指輪に触れる前に目が覚めてしまうのだ。残るのは独特的の氣急さだけ。

「はあ…」

そういえば結局昨日は最後までレグと言ひ合つたまま部屋に籠つてしまつた。

気まずいわけではないが、やはり少し顔を合わせにくい。

幸い、今はまだ夜明け前のように、あと数時間は一人きりの時間だ。ルイクはそつとベッドから起き上がりと無駄に広い部屋を歩いて観音開きの窓を開けた。

冷たい空気が晒し出された肌を撫で、白いスリップドレスを揺らす。それと一緒にルイクの明るい金の髪をさらさらと靡かせた。

ルイクにとつて、この髪はコンプレックスだった。

リーヴル家は王家に次ぐ位の高い家柄なので、血を絶やさないよう、親類同士での結婚が多い。従兄弟などでの結婚も珍しくなく、実際ルイクの両親もはとこ同士での結婚だった。

だからリーヴル本家は代々銀の髪を受け継ぐのが当たり前で、ルイクの金の髪はリーヴル家中では異質なのだ。

特に両親は生まれてすぐのルイクを抹消しよつとしたくらに金の髪を毛嫌いしていた。

幸いフェンライトのお陰でルイクは生きながらえたが、両親に愛情を注いでもらつたことなど一度もない。

なんでも、母方の姉妹の中に金の髪を持つ人がいたらしく（今は家を出てしまつているが）、その人がとんだ変人らしい。悪魔に魂を売つたとか、リーヴル本家を呪つているだとか、そういう噂は後を絶たない。そして使用人の中にはその伯母の存在を知る者もいて、そのためいつもルイクのことを「忌まわしき子」と陰口を叩く。

「はあ……」

それを思い出して、ルイクはまた重々しくため息をついた。
ため息をつく度に幸せが逃げてしまうのだとフェンライトから言われたことがあつたが、そんなものは今更だ。

兄様、早く帰つてこないだろうか……

そう思つて視線を上げた、その時。

「？」

窓を、何か黒いものが横ぎつた。数瞬遅れて風が吹く。
さつきよりも少しだけ激しく髪と短いドレスの裾が揺れた。

「なんだつたんだ……？」

黒いものがなんだったのかはわからない。
しかしどうしたことなく不吉な予感がして、ルイクはそそくせと窓を閉めた。

まだ夜明け前だ。もう一度寝直すのもいいかもしない。
そう思つてルイクが振り向く。
すると、そこには、

「ツー？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4553z/>

Lost Refrain

2011年12月21日20時54分発行